

## 自由論題分科会 (21 日、西キャンパス本館)

## 〔自由論題 D〕 文学 1

〈午後 1〉 28 番

座長：白水紀子（横浜国立大学）

## D-1：高峽（日本学術振興会特別研究員 PD）：『駱駝祥子』における北京の時空間について

北京が老舎（1899～1966）文学の重要なトポスであることは、改めて指摘するまでもない。このことは、彼の代表作『駱駝祥子』においても例外ではない。しかしながら、具体的にどのような意味でそう言われるのかについては、従来の研究では十分に検討されてこなかった。

『駱駝祥子』は、自前の人力車を持つことを夢に持ち、やがて墮落していく一人の若者、祥子を描いた作品である。祥子の不幸な「偶然」の数々が、すべて北京を舞台に展開されている。物語の中盤で、結婚を迫られた祥子には北京から離れる道もあることが示唆されるものの、作者はかなり無理に祥子を北京に留まらせ、人力車を持つという夢を追い続けさせている。したがって、当該小説における北京は、単なる物語が展開する場所ではなく、それ自体が重要な意味を持っていると言えよう。

『駱駝祥子』では、祥子の運命の展開とともに、北京という都市が春夏秋冬の時間軸に沿って描かれている。このことは、小説に散りばめられている北京の四季の風俗描写からもうかがい知れる。それと同時に、北京に結びついたそれらの風俗が資本主義商品経済の広がりによって破壊されていく様子も描き出されている。このように、老舎の小説における都市、北京という空間には、不動な背景ではなく、時間の流れや歴史の記憶が刻み込まれていると考えられる。

近代と時間・空間の変容とは密接な結びつきがあることは、すでに多数の指摘がある。近代資本主義システムに巻き込まれた北京はいかなる変動を経験し、またその経験の意味はどのように問われていたのだろうか。本報告は、このような問題意識を念頭に置きつつ、『駱駝祥子』における時空間の在り方を分析する。

## D-2：天神裕子（お茶の水女子大学・院）：「遷台」女性作家が描いた“理想の家庭”言説

——『中央日報』「婦女与家庭」より——

近代中国における「家庭」概念は、五四運動を契機に旧式の家父長制度から新しい西洋的な新家庭への脱皮が提唱され、大きく変化した。その後 1930 年～1940 年代の日中戦争時期には、家庭の概念は戦時体制の国家強化政策に沿うものとなる。

国共内戦に伴い台湾に渡った多数の軍人、官僚、知識人のなかには、五四新思想の洗礼を受け、戦時には家庭を守る主婦として生活していた女性知識人たちがいた。

台湾は 1895 年以来 50 年間日本の植民地となり、日中戦争が勃発した 1937 年からは皇民化政策がとられていたが、戦後は国民政府により日本語から北京語への徹底的な公用語切り替え政策が推進された。大陸から台湾へ渡ってきた「遷台」女性作家たちは、北京語という言語的優位性をもち、新聞の読みもの欄などで盛んに文章を発表していった。なかでも国民党の機関紙『中央日報』の「婦女与家庭（婦人と家庭）」欄には、合理的な家事のノウハウをはじめ、家庭や婚姻のあり方について多数の散文や短編小説が発表されている。これらの文章は、日本時代の「家庭」概念が浸透していたと思われる当時の台湾で、女性自身によって描き出された新たな「家庭」の言説であるため、きわめて重要であり注目に値する。

本報告では、『中央日報』の「婦女与家庭（婦人と家庭）」欄をテキストとし、かつて中国大陸で五四新思想の洗礼を受けたであろう女性作家たちの「家庭」概念が、戦後の台湾でどのような「理想の家庭」の言説として現れたかについて考察する。それにより、戦後台湾のマスメディアにおいて「遷台」女性作家たちが発信した「家庭」概念の一側面を明らかにする。

### D-3：栗山千香子（中央大学）：消された物語

#### ——梅娘『蟹』の改作問題および新たな読み方の可能性について——

梅娘は、1940年代に北京を中心に活躍し名声を得た女性作家である。また、1930年代後半の日本留学中に本格的な創作を開始し、1943年には小説『蟹』で大東亜文学賞を受賞、“満洲国”屈指の女流作家ともてはやされた作家でもある。新中国建国後、その名は1978年の名誉回復まで封印されたが、1980年代以降は作品も復刊され、梅娘とその著作についての紹介・研究がすすんでいる。ただし、『蟹』を含め復刊された作品の一部には発表当時とは異なる変更が加えられていることも明らかになっている。

『蟹』は、満洲事変から二年後の長春の大家族・孫家の物語である。さまざまなうわさやデマが飛び交う不穏な街の様子を背景に、かつて財力と名声を得ていた一家が、要である人物を失ったあとそれぞれ勝手な思惑を抱いて行動し、崩壊の道をたどっていく過程を描いたものだ。これまで、家にも女学校にも閉塞感を感じ将来を悲観する孫家の娘・鈴には梅娘自身が、社会的にも人格的にも立派な鈴の父には梅娘の父の像が投影された自伝的要素の濃い作品として読まれてきた。

しかし、鈴が姉のように慕う翠（孫家の使用人の娘）に視点を移してみると、物語はまた違った様相をみせる。物語の中ほどで翠は鈴を慰めながら、自立する術を身につければ何も心配ない、そして誰かに愛されるのを待つのではなく人を愛することができれば自分も寂しくないと言ふ。さらに翠は、かつて鈴からきいたというある物語——多くの人への愛のために恋人を射殺した最も偉大な女性の物語——を語る。翠の存在が際立つこの場面と翠によって唐突に語られるこの物語は、新たな読み方への手がかりとなるはずだ。

本報告では、梅娘の代表作である小説『蟹』について、「翠の物語」と翠によって語られる「偉大な女性の物語」に着目し、そこに託された新たな読みの可能性——“新女性”像を読み解く。さらに、「偉大な女性の物語」の由来について一つの仮説を述べる。また、近年復刊されたテキストの中でこの場面が完全に削除されてしまっている事実と、その意味について検証する。

### D-4：河村昌子（明海大学）：高行健『一個人的聖經』における語りの特徴——残された一人称——

高行健の作品では、しばしば、主人公格の人物が“我”“你”“他”の3つの人称で表現される。高行健の作品の特徴が人称の用い方にあることは、これまでも指摘され、論じられてきた。例えば、中国語圏で最も高く高行健を評価し、精力的に論評を発表している劉再復は、「高行健は「3」を発見した。主体（人）には、2つではなく、3つの座標があること、主体の内部には、二重ではなく、三重の関係があり、二次元から三次元に拡大されることを発見した」「高行健の3つの人称、3つの座標は、極めて大きな芸術的発見である」（「高行健和他の精神之路」）と、述べている。

その劉再復によれば、『一個人的聖經』は、「さらに思い切って、第一人称の“我”を取り去り、“你”を今この叙述者、冷静な観察者とし、テキスト中の行為主体である“他”に、論評と抑制を加えている」（「論高行健状態」）という。

『一個人的聖經』は、祖国を離れた作家の“你”が、造反派紅衛兵であった文化大革命時代を、“你”の分身である“他”の視点から回想し、総括する物語であるが、劉再復の指摘に沿って主人公の語りの人称を確認すると、確かに、ナレーション部分では、“你”もしくは“他”のみが用いられており、“我”は無い。しかし、カッコ書きの科白部分には、わずかに“我”の使用が認められ、これは、『一個人的聖經』の他の登場人物が、科白部分で、頻繁に“我”を用いて心情や経歴を語り、雄弁であるのと対照的である。高行健は、主人公の科白を書く際、相当慎重に一人称の使用を制御したのであろうと推察される。

本報告では、この、残された一人称の意味を考察したい。

## 〔自由論題 G〕 文学 2

〈午後 2〉 28 番

座長：代田智明（東京大学）

### G-1：秋吉收（九州大学）：魯迅の散文詩集『野草』における周作人、佐藤春夫の影

魯迅文学芸術の粹とも評される散文詩集『野草』に関する膨大な研究の中に、弟周作人の関与、影響を論じた専論は管見の限り見当たらない。詩作が極めて少なく、散文家、エッセイストとして著名な周作人と“詩”が容易には結びつかないことがその一因であろうが、1923年に突如訪れた兄弟二人の決定的な断絶の翌年から書き継がれた魯迅の『野草』が、一層、周作人から遠いものと意識されるのも当然の成り行きであろうか。また文学的にも、魯迅『野草』の深淵に周作人は到底及び得ないとの研究者の認識があるようだ。例えば『野草』のモチーフとなっている“死”に対する意識について、錢理群氏は、周作人の“死”への意識は、そこから逃避して享楽を愉しむものであり、魯迅には遠く及ばないと断ずる（1991、『周作人論』）。だが、竹内好はその著『魯迅』の「伝記に関する疑問」（1944）に次のように書き付けた。「魯迅と周作人とは、表現は極端にちがうが、ある意味ではお互が相手を影にもつほど本質的に類似している。思想的にそうであるばかりでなく、気質的にもそうである」。また武田泰淳も「周作人と日本文藝」（1944）の中で次のように述べている。「この二人の兄弟の態度は、正反対であったの如く考へられがちである。しかしそれは陰陽両性ともいふべき身の處し方の相違だけで、二人の裏を見、表をながめて行くうちに共通する精神のしこりに到達し得る、さうした両面なのである」。このように先達は早くに兄弟二人の関係を示唆していたが、実証的な研究はまだ十分とは言えない。

報告者は、魯迅『野草』を軸として展開される魯迅そして周作人の文学的営為について調査を進めていきたいと考えているが、今回の発表では、特に佐藤春夫への注目を一つの端緒として、新たな視点から考察を試みたい。

### G-2：伊藤徳也（東京大学）：北斗生「支那文壇無駄話」を周作人の逸文として読む

『北京週報』第 69 号（1923 年 6 月 17 日）所載の北斗生「支那文壇無駄話」は、周作人が日本語で書いた逸文だと考えられる。この文章の概略は拙著『「生活の芸術」と周作人—中国のデカダンス＝モダニティ』の中で紹介した。本報告の目的は、その推定をもとに、「支那文壇無駄話」の内容を検討し、1923 年当時の周作人における“頹廢派”文人像の、より精緻な性格付けを行なうことにある。

周作人は同年同月に「新文学的の二大潮流」という文章を書いている。“二大潮流”とは“頹廢派”と“革命文学派”である。この文章の中の“頹廢”概念と“頹廢派”の性格付けには、H・エリスの頹廢論が反映しており、周作人はそれを中国文壇に投影して、中国における“頹廢派”の出現に期待を示したので

あった。しかし、抽象的な議論だけで、具体的な人名、作品名にはまったく触れていない。

それに対して「無駄話」の北斗生は、当時の中国文壇の新興勢力二派を取り上げて、非常に具体的な批評を行なっている。二派というのは、一つは「北京にある英国式耽美派」、もう一つは「上海にある日本仕込のプロ文士の連中」であり、前者は陳源と徐志摩、後者は創造社の同人（特に『創造週報』以降の）である。北斗生の批評は、批評対象とした徐志摩、陳源、成仿吾の文章の一部を日本語に訳して忠実に引用しており、新興勢力であった徐、陳、成に対する周作人の率直な（中国語文壇に表示するのを憚った）印象を伝えているものと思われる。

周作人が「二大潮流」でその出現を期待した“頹廢派”は、明らかに「無駄話」で嫌悪感を露にした「耽美派」とは一致しない。のちの「女師大事件」をきっかけにした陳源及び徐志摩との対立を念頭に置きつつ、「無駄話」における「耽美派」像を付き合わせてみると、周作人の言う「頹廢派」文人の独特の社会性があぶり出されてくるように思われる。

### G-3：西槿偉（熊本大学）：師弟関係の物語

——豊子愷『教師日記』とハーン『英語教師の日記と手紙』とアミーチス『クオーレ』をめぐって——

『教師日記』（1944）は、豊子愷（1898-1975）が日中戦争の間桂林、宜山で教職をつとめていた時期の日記である。その記述は『豊子愷年譜』（盛興軍主編、2005）に大幅に取り入れられ、記録的な価値が認められている。しかし、『教師日記』をそのまま作者本人の生活記録とすること自体に問題があり、このテキストは「日記文学」として読まれるべきであろう。

本報告では、比較文学の視点から、日記文学『教師日記』の解読を試みる。比較の対象として、ラフカディオ・ハーンの『英語教師の日記と手紙』（田部隆次編、訳注、北星堂、1920）を選んだのは、ハーンが豊子愷の視野にあったからであり、同書は『教師日記』と形式、内容ともに類似しているうえ、豊子愷が1938年の随筆で言及した『虫の文学』（1921）と『海の文学』（同前）と同じ叢書に収録され、刊行は豊の日本留学の前年である。

また、豊子愷はアミーチスの『クオーレ』の中国語訳（『愛的教育』1926）の挿絵を描いており、同書の日本語訳は彼の蔵書にも含まれている。『教師日記』の創作に際して、豊子愷が『クオーレ』を意識した可能性も充分考えられる。

比較の視点により、『教師日記』からメインテーマとして豊子愷と馬一浮の「師弟関係の物語」が立ち現れるであろう。そして、豊子愷は儒教的な師弟関係を重んじるのだが、その傾向はハーンにおいてもみられ、両者の比較は日中両国の「西洋化と伝統文化」の問題を改めて考えさせるにちがいない。

### G-4：徐曉紅（東京大学・院）：未亡人の生の叫び

——施鵬存、ハムスン、シュニッツラーの作品を中心に——

施鵬存（1905～2003）は、民国期の上海の文壇で作家・ジャーナリスト・翻訳家として活躍した。ハムスン文学が中国で流行していた20年代、施はその愛読者の一人であり、ハムスンの『恋愛三昧』（Pan）を翻訳したほか、彼と関係の深かった同人社団、水沫社はハムスン『餓』（Sult）の翻訳出版を手がけ、同人誌にハムスン関係の記事を記載している。『恋愛三昧』の神秘的な雰囲気、詩趣の豊富さ、巧妙な修辞は、施鵬存の創作とも共通する特徴だと言えよう。施鵬存の執筆した「周夫人」には、ハムスン「生の声」と同様に、女性の微妙な心の移り変わりや一人称を用いた鋭い感性などが見られることから、施

のハムスンに対する共鳴がうかがえる。

一方、施蟄存文学の重要なテーマとして、女性の抑圧された性衝動、性愛への諦念があげられる。施蟄存が翻訳したシュニツラーの『多情的寡婦』(Frau Berta Garlan)は、未亡人が抑圧された情動を解き放ち、日常を打ち破ろうとしたものの、結局彼女の恋心は急速に幻滅へと転化してしまうという経緯を描いている。施蟄存の「春陽」にも同様に、女性が情事の空しさを知るという筋立てがある。すなわち、未亡人の嬪阿姨は、恋愛に対し切実な憧れを抱くが、男性に抱いた好感は自意識の妨害によって内心にしまいこまれてしまい、幸せを手に入れるための一歩を踏み出すことはなかったのであった。

本報告では、施蟄存の初期文学にみられる人間の内面心理への関心をふまえ、未亡人のリビドーを題材とする二つの作品をとりあげて、ハムスンやシュニツラーとの共通点を比較・検討する。そこから、人間の内面心理に対する注目が施蟄存文学に通底しており、彼の文学はそれに翻訳文学への共鳴があわさって豊かなものになったことを明らかにする。さらに、古今東西を問わず中国の伝統文学と西洋文学を巧妙に調和・融合させた、施蟄存独自の現代派文学について考察したい。

